

## 「桃水暦」としての一葉日記と徒然草

\*1) 島内裕子

### 一 はじめに

樋口一葉の日記は、明治二〇年一月一五日を書き出しとする「身のふる衣 まきのいち」を第一冊として、明治二九年七月二二日を書き終わりとする「みづの上日記」にいたるまで、四〇冊あまりが残されている。これらの日記には「若葉かげ」「蓬生日記」「しのぶぐさ」「塵中日記」「水の上日記」などという題がついている。また、同じ題がついていても、冊子が改められて書き始められているものも多い。たとえば、題名の表記はさまざまであるが、「蓬生日記」という題に類する題名の日記は七冊、「しのぶぐさ」に類する題名は四冊、「塵中日記」に類するものは一〇冊近くある。

これらの日記は、一葉の文学や日常を考える上で非常に重要であることは言うまでもない。しかし、約一〇年間にわたる一葉日記の全体像を、明確に浮かび上がらせている研究は少ないように思われる。このように書くときに、和田芳恵氏や塩田良平氏の労作をどのように位置づけているのか、という反論が起ることは必至であるが、先学の研究は研究として、わたしとしては、それらが詳細な労作であればあるだけ、細部は明瞭であっても、一葉日記全体を貫く低音部が聴き取りにくいように思うのである。

本稿では、わたし自身が一葉日記から、一葉の肉声をどのようにに聴き取ったかということ、いくつかの観点に絞って書き記したい。テーマを絞ることによって、当然こぼれ落ちるものがあるが、日記の内容のすべてを取り上げ詳述することは、

たとえばどれほど紙数があつたとしても、不可能に近い。それなら、研究者はおのれの関心に沿って対象をきつく絞り込むことによってこそ、その対象の一面の真実を、浮かび上がらせることができるはずである。ここでは、一葉日記の全体を見渡しつつ、そこから恋愛に関する批評的感想が書かれている部分に特に注目し、それらがほとんどの場合、半井桃水に関わっていること、および桃水への思いを吐露する場合の一葉は、徒然草を自己の思考のよりどころとしていることを中心に述べたい。

## 二 「桃水暦」としての一葉日記

樋口一葉が半井桃水に対して、生涯にわたる恋心を抱いていたということは日記の端々からうかがわれることであるし、塩田良平氏も「永遠の愛情」ということばで概括している。<sup>①</sup>特に桃水との「最初の一年」においては、日記の記述のほとんどが桃水関係の記事で占められている冊子もある。このことは、単に、一葉日記には一葉と桃水の交際も書き記されているということを示しているのではなく、むしろ逆に桃水のことを書くために日記が書かれているといつても過言ではないだろう。そもそも、一葉の場合、日記を書くということは、決して日常の出来事の記録として平板に連日書いていたのではなく、何か特別に書くべきことがあつた日に力点を置いて書くというのが基本

方針であつた。したがって、最初の日記「身のふる衣 まきのいち」は、まず中島歌子の歌塾「萩の舎」の発会で、一葉が最高得点の和歌を詠んだことを書くために書き始められたのであつた。しかし、その後、長兄泉太郎の死と父則義の死という二重の不幸に遭遇した時期には、まとまつた日記は書かれていない。あまりにも悲しみが大きかつたために当時は日記を書くことさえできなかったのだろう。兄や父の死について一葉が書き記し始めるのは、二、三年経ってからである。

その後、明治二十四年の四月になつて小説家半井桃水に入門した後は、詳しい日記が書かれ始める。しかも、重要なことは、「最初の一年」を経て、桃水との交際が周囲の反対によつて断たれた後も、間歇的に桃水への思いが書かれていることである。そして、その記述の背景を探ってみると、だいたいにおいて、特定の日に桃水に関する感想的な記述をしていることに気づかされる。たとえば次のような記事を見てみよう。

① ありし去歳を思ひ出るに、まことに今日なりけり。かの大人より、「俄かに言ふべきことあり。人前にてはいと云ひにくきを、夜なりとも参らせ給はらずや。御帰りは車にて送らすべし。」とありしに、母君中々に許し給ふべくもあらで、この早朝に平河町を訪ひにき。<sup>②</sup>

(明治二十五年二月二〇日)

② 去歳の此頃はいみじう悩み給ひて、我日毎に訪ひ参らせぬる頃と思ふに引きかへ、文をだに参らせがたき今の、いかに御あたり訪ひ寄らるべき。

(明治二六年四月一五日)

③ 静かに数ふれば、まことや此人と疎くなりそめぬるは、一昨年の今日よりなり。隔たりゆく月日のほどに幾度心の改まりけん。

(明治二七年七月一二日)

これらの記事のように、一葉は一年前、二年前の桃水との出来事を感じ深く思い出しては、自分の今の気持ちと重ね合わせて、心境を吐露している。したがって、一葉の日記を考えるにあたっては、桃水との関わりに注目しながら読んでゆくと、日記の全体にわたって貫流している一葉の心情が、浮き上がってくると思う。そこで、西暦ならぬ「桃水暦」という視点を導入し、桃水との交際を起点として、一葉日記を概観してみたい。しかも、このように日記における桃水の影を重視して読んでみると、桃水の名前は直接書かれていなくても、感想的な詳しい心情表白が間歇的に現れる原因が納得できるのである。

### 三 「桃水暦」の三つの重要日付

「桃水暦元年」は、明治二四年四月であるが、「桃水暦」の中

で、特に後々まで一葉にとって忘れがたい出来事は、初対面の明治二四年四月一五日、雪の日に桃水宅を訪問して差し向かいで長時間過ごした明治二五年二月四日、および、心ならずもこれを最後と訪問を断念した明治二五年七月一二日である。この中で二月四日は「雪の日」と名付けられて一葉研究の上で従来から重視されているが、他の二日も、四月一五日を「出会いの日」、七月一二日を「別れの日」と名付けて、本稿では一葉にとっての記念日的な重要日付として扱いたい。

#### (1) 「出会いの日」

「出会いの日」である四月一五日という日付に注目して、その前後も含めながら日記を見てゆくと、まず、次に掲げる明治二六年四月の一連の日記の背景が理解される。「桃水暦三年」の日記である。

① 藤本（都の花）主筆、藤本藤陰へ行く。半井君の消息を聞き得たり。  
(四月一五日)

② 我心より出たるかたちなれば、なか忘れんとして忘るるに難き事やある、とひたすらに念じて、忘れんとするほど、唯身に迫り来るがごと、面影のまのあたりに見えて、え堪ゆべくもあらず。ふと打みじろげば、かの薬の香の、さとかをる心地して思ひやる心や常に行きかよふ

と、そぞろ恐ろしきまで思ひ染みにたる心なり。かの六条御息所のあさましさを思ふに、げに偽りとも言はれざりけりな。

(四月二日)

③ 小石川稽古に行く。道すがら半井君を訪ふ。

(四月二日)

④ さしこめたる雨戸を一寸ばかり開きて、邦子は静かにつれづれ草読むなるべし。(雷は)やや静まりぬ。我は文机に寄りて、とざまかうざまにも思ふほど、頭ただ悩みに悩みて雷雨の恐ろしきも何も耳に入らず。魂何方の里にさそひ行かるらん。一時間ばかり夢の様になりぬ。ふと覚へぬる時は、雨戸漏る日影いとけざやかになりて、さしも空は名残なく晴れ渡りしなり。

(四月二五日)

この明治二六年四月中旬の日記の記述には、藤本藤陰のところで桃水の噂を聞いたことから発して、桃水の面影をはつきりと感じ、まるで自分が『源氏物語』の六条御息所になったかのような桃水への執着心を自覚し、その思いに抗することができず、母や妹にも告げず密かに桃水の家を訪問し、その後も魂が遊離するような体験をしたことが書かれている。

一葉日記の中でも、このように彼女が家族に黙って、桃水の許を訪ねる場面は珍しい。一葉は普段は、どれほど桃水と逢

いたくても、母や妹に反対されれば決して出掛けたりはしないのである。ではなぜこの場面で、これほどまでに一葉が大胆な行動を取ることができたのだろうか。それは恐らく、藤陰のところで桃水の噂を聞いた日が、偶然とはいえ、四月一五日だったからではないだろうか。ほかならぬ四月一五日に桃水のことを聞いたということが、一葉の心の中で、偶然から必然へと転化し、何としても桃水に逢わずにはいられないところまで、一葉の硬い心を揺さぶったのであろう。なぜなら、ちょうど二年前の四月一五日に、一葉は初めて桃水と対面した時、桃水が一葉に細やかな思いやりを示したことに感激し、桃水に親愛感を抱いたからである。

②と④は、一葉日記の中でも非常に劇的なもので、今まで理性によって抑制してきた恋情が、一葉の自己規制を打ち破って外部へ流出する様として描かれている。特に④の場面で、激しい雷雨の中で、強い頭痛にひどく悩まされている一葉が、再び②のように魂が肉体から遊離しそうになっている時、傍らでは妹の邦子が徒然草を朗読しているというのは、非常に象徴的である。つまり、ここで轟いている季節外れの激しい雷鳴は、一葉の抑えがたい激情そのものであり、それを鎮めているのが、邦子の徒然草朗読なのである。いわば、「物の怪」調伏の役割を果たしているのが徒然草であるとも解釈できよう。一時間ほど経ったころには、雷雨はすっかり止み、空も晴れ渡ったという

のも、これまた象徴的に解釈すれば、徒然草の効き目によって、一葉の「物の怪」めいた激情が消滅したことを暗示している。一葉の桃水への思いと、徒然草が関連している箇所として注目すべきであろう。

なお、先に引用した記述は、「蓬生日記」によったが、この部分は重複してもうひとつの日記「しのぶぐさ」にも書かれている。この「しのぶぐさ」には、日付としては四月一二日から五日までしか書かれていないが、<sup>③</sup>「蓬生日記」には書かれていなかった桃水宅訪問時の様子が日付なしで書かれている。なぜ一葉が二つの日記に同時期のことを書いたのか、またどちらが先に執筆されたのかなど、考察すべき点は多々あるが、それらの考察は、他日を期したい。<sup>④</sup>

次に、明治二八年四月の日記「水の上日記」を見てみよう。「桃水暦五年」のことである。ここも、「出会いの日」を意識して書かれたのではないかと推測できる内容となっている。

⑤ 春雨降りて今日はいとつれづれなり。なすべきことどもひとわたり果てて、身の暇やうやう得らるるに、田中刀自が許、伊東の夏子ぬしなど、訪はばやと家を出づ。

⑥ 憂き世にはかなきものは恋なり。さりとてこれの捨て難く、花紅葉のをかしきもこれよりと思ふに、いよいよ世ははかなきものなり。等思三人、等思五人、百も千も人

も草木も、いづれか恋しからざらむ。深夜人なし。硯をならして我身を顧みてほほゑむ事多し。憎からぬ人のみ多し。我はさは誰と定めて恋わたるべき。一人の為に死なば恋死しといふ名も立つべし。万人の為に死ぬればいかならん。知る人なしに怪しう異物にや言ひ下されん。いで、それもよしや。

世の人はよも知らじかし世の人の知らぬ道をもたどる身なれば

明治二八年四月から書き始められている「水の上日記」の冒頭が⑤である。ここには日付は書かれていない。⑤で引用した後にまだ記述は続いており、この日の行動が簡単に書かれている。次に一七日から二二日までの日並み日記の後に、⑥が書かれており、⑥の後に二四日以下の日記が続く、という構成になっている。したがって、⑤は四月一六日頃、⑥は四月二三日の日記と一応は考えてよいだろう。

この「水の上日記」は、前年の一月九日から一三日までの日記「水の上」以後、五ヶ月ほどの中断を経て書かれた久しぶりの日記であった。「水の上」にしても、それ以前の日記からは三ヶ月以上も経ってから書かれたものであり、この時期の日記は、もともと書かれなかったのか散佚したのか不明であるが、現存しない。当時の一葉一家は、一年足らずの下谷龍泉寺町で

の荒物屋の商売の不振で、再び本郷に戻ってきていた。経済的にはきわめて窮迫していたが、作家活動としては、『文学界』に「暗夜」や「大つごもり」「たけくらべ」などを発表し、一葉文学の開花期であった。

さて、先ほど引用した「水の上日記」がそれ以前の約五ヶ月の中断後に現れていることの意味を考えてみたい。筑摩書房版『樋口一葉全集』の補注では、「二十七年七月末以後二十八年四月までの空白が、日清戦争の期間に相当しており、この四月に書き始められた『水の上日記』は、和平交渉成立の記録で始まっている。」とした上で、「この戦争に関する記録の削除を思い立ったのではないか、と想像してみたい。」と書かれている<sup>⑤</sup>。しかしながら、果たして一葉がそこまで社会の動きと自分の日記を連動させていたか、疑問である。むしろ一葉日記全体の流れから考えれば、四月一六日から書き始められているのは、その日が和平交渉成立の日だったからではなく、一葉の心の記念日である「出会いの日」が再び巡ってきたことを、無意識の内にも感じ取っていたからではないだろうか。しかも⑤の書き出しは、「春雨降りて今日はいとつれづれなり」となっている。このような表現は、王朝女流日記の雰囲気の色濃く漂わせている。たとえば、『和泉式部日記』などにはこのような表現が頻出し、そこでは、春の長雨を眺めながら恋人のことを思い続けるという、ほとんど類型化した行為が書き綴られる。一葉の場合、王

朝時代の女性とは違って、じつと家に籠っていたりはせずに、女友達を訪問しに出掛けるという行動を取っている。しかしながら、その現実の行動とは別に、日記の書き出しの表現自体は、恋人への晴れぬ物思いを志向しているのである。だからこそ、唐突とも思える⑥のような恋愛観が、ここに書き留められているのではないか。一葉の日記には、日々の出来事の記述の合間に⑥のようなややまとまった感想的な一葉自身の考えが書かれているところがある。それらは恋愛に対する一葉の思いが書かれていることが多く、一見唐突な感じでふと書かれているのだが、その前後の日付に注目すれば、決して偶然にそこに位置しているのではなく、桃水との思い出の日に触発されて書かれていることが、明確になってくるのである。

毎年四月の半ば頃になると、桃水との「出会いの日」が自然と思い出され、それが心にわだかまっているうちに、⑥のような感想が書かれたのではないか。自分と桃水との恋のはかなさを実感し、「憂き世にはかなきものは恋なり」と書き出されたのであろう。しかしそれに続く一連の感想は個人的な感情から脱して、ついには自分は「世の人の知らぬ道」を辿っているのだと、一個の自立した精神を獲得している姿として自分自身を捉えているように見える。その点では、いかにも「桃水暦五年」の歳月を感じさせるが、心の深奥では、あるいはいまだに桃水への恋情も、皆無とはいえないかもしれない。「我はさは誰と定

めて恋わたるべき」ということは、どこかしら反語の響きがある。なお、先ほど引用した全集の補注を参考にすれば、「万人の為に死ぬればいかならん」という部分には、日清戦争の影がうかがわれるかもしれない。

## (2) 「雪の日」

さて次に、一葉にとって忘れ難い思い出の日となった明治二年二月四日の「雪の日」に関わる日記を見てゆこう。この「雪の日」とは、激しい雪の中、平河町の桃水宅を一葉が訪ね、同人雑誌のことや一葉が書くべき小説のことなど詳しく話し合い、桃水が隣から鍋を借りてきて手製の汁粉を作って一葉に御馳走してくれた日のことである。この場面は一葉日記の中でもきわめて抒情的で、一編の物語のようなシーンである。午前中から降り始めた雪は次第に激しさを増していたが、かえって外部の世界から二人を隔てる役割を果たしている。

一葉はこの時の桃水の優しさに感激しているが、しかしこの桃水の優しさは一葉個人に対してだけ発揮されたものではなかった。手製の汁粉にしても、実は桃水の自慢料理だったようである。後年、桃水の妹の嫁ぎ先の娘たちも、汁粉を御馳走になったことを印象深く思い出している。<sup>⑥</sup> そもそも、一葉と桃水の交友は、客観的に見れば一葉の片想いであった。桃水自身も一葉の思い出を書いているが、それを読めば、桃水の方では一葉に

対して恋愛感情を持っていなかったことは明らかである。<sup>⑦</sup> それにもかかわらず一葉は桃水の人間的な優しさを自分自身の心の中で、美しい夢として生涯抱き続けたのであった。一葉日記に散見される恋の苦悩と、それをいかにして克服するかという激しい葛藤は、したがって一葉ひとりの自己格闘だった。しかし、そこから一葉は自分の心の深部を凝視し、自らの進むべき道を探索していったのである。

明治二六年一月末から二月初めにかけての日記を見てみよう。

① 夜いたう更けて、雨だりの音の聞こゆるは雪の溶くるにや、と閨の戸押して見出せば、庭も籬もただ銀の砂子を敷きたるやうにきらきらしく、見渡しの右京山ただここもとに浮出たらん様にて、夜目ともいはずいとしるく見ゆるは、月になりぬるべし。こころ思ふことをみながら捨てて、有無の境を離れんと思ふ身に、猶忍び難きは此雪の景色なり。とざまかうざまに思ひ続けるほど、胸の内熱して堪へ難ければやをら降りて雪を掌に掬はんとすれば、我が影落ちてありありと見ゆ。月は我が軒の上昇りて、閨ながら見えざりしぞかし。空はただ磨ける鏡の様に、塵ばかりの雲もとどめず、何方まで照るらん。そぞろにながむるも寂し。

降る雪にうもれもやらで見し人の面影浮かぶ月ぞ悲しき

我が思ひなど降る雪の積もりけんつひに解くべき仲にもあらぬを  
(一月二十九日)

② 恋はあさましきものなりけれ。心を尽くし身を尽くしてなりぬべき仲ならばこそあらめ、この恋なるまじきものと、我から定めて猶忘れ難く、ぬばたまの夢のうつつ思ひわづらふらんよ。  
(二月五日)

③ 昼頃より雪降り出づ。万感ここに生じて、散乱の心ことに静め難し。我が雪の日を愛づるは、愛づるにはあらで悲しむなりけり。かの火桶を挟みて物語のどかに、手づから調理し賜はりし汁粉の昔、恋も悟もかの雪の日なればぞかし。  
(二月二十七日)

①は、夜中になって雪が止んだらしいので、戸を開けて庭を見ると、一面の銀世界になっており、近くの小高い岡の右京山がはつきりと見えたので、いつのまにか月が照っていたことに気づいて、感慨に耽る場面である。このあたりの書き方はまるで古典文学の『源氏物語』や女流日記のようである。たとえば、『十六夜日記』で名高い阿仏が二〇歳頃に書いた『うたたね』という作品にも、雪が晴れた後、照る月を見ながら恋人のことを思うシーンがあり、この状況がよく似ている。

雪かきくらしして風もいとすさまじき日、いととく下し廻して、人二三人ばかりして物語などするに、夜もいたく更ぬとて、人は皆寝ぬれど、露まどろまれぬに、やをら起き出でて見るに、宵には雲隠れたりつる月の、浮雲紛はずなりながら、山の端近き光のほのかに見ゆるは、七日の月なりけり。見し夜の限りも今宵ぞかしと思ひ出づるにただその折の心地して、さだかにも覚えずなりぬる御面影さへ、さし向かひたる心地するに、まづかきくらす涙に月の影も見えずとて、仏などの見え給ひつるにやと思ふに、恥かしくも頼もしくもなりぬ。<sup>8)</sup>

ここは、『うたたね』の中でも重要なシーンで、主人公がこの二ヶ月後に出家を実行する決意をする場面である。一葉の日記と同じように激しく降っていた雪も夜になってようやく止み、外を見ると月が照っている。その月に恋人の面影を見出して泣くうちに出家の決心をしている。彼女の場合は、当時すでに家族もなく、失恋の痛手はただちに出家へと繋がっていった。これに対して一葉の場合は、戸主として、母と妹を養うという義務感に縛られており、自由な行動を取ることはできなかった。しかし、一葉も、心の中では出離への願望が強かったことは、傍線を付した、「こころ思ふことをみながら捨てて、有無の境を離れんと思ふ身に」という部分に表れている。



一月二十九日の日記は、もちろん『うたたね』の影響ではなく、偶然に状況や心境が類似したのであろうが、そのことは一葉日記が、このあたりでは非常に女流日記文学の世界に近くなっているということを示している。その一方で、先に引用した分離願望にもかかわらず、「猶忍び難きは此雪の景色なり」と続けているのは、『うたたね』とは逆に、桃水への思いが強い執着として、この世と自分を繋いでいることを意味している。その点では、むしろ、「この世のほだし持たらぬ身に、ただ空の名残のみぞ惜しき」というある世捨人のことばを記した、徒然草第二〇段と類似しているように思われる。

①で、もうひとつ注目したいのは、和歌が二首書かれている点である。このように、散文と和歌が融合した書き方も、古典の女流日記文学的である。一葉の日記には、このような書き方が時々見られる。たとえば、①を含む日記に続く、二月半ばから七月半ばにかけての日記群にも、和歌が混じる割合がそれ以前と比べて多くなる。この時期の一葉日記は、それ以前のものと少し違った歌日記的なものとなっている。それがどの程度意識的であったかはわからないが、新たな自己表出の形式を模索していたのかもしれない。

一葉は後に明治二八年頃、「詞がきの歌」という形式を試みている。<sup>9)</sup>しかし残念ながら実際に書かれたのは、「詞がきの歌」という表題と、冒頭の序文的な未完の文章だけである。けれども

その未完の序文によれば、一葉が「詞がきの歌」で描こうとしたのは、「われに恋のなしとは言はず」とか、「ただ恋しき時は恋しきと書くほどに」などとあるところから、内容としては恋愛の思いを中心とするものになっていただろうと推測される。さらに、「人の聞きを憚りて思ふ思ひを述べてやあるべき」とも書いているので、かなり大胆に自分の率直な気持ちを書こうとしていたこともわかる。ただし、結果的には「詞がきの歌」は書かれなかったのであるから、そのことが逆に、一葉の指す文学のあり方が、決して私的な感情の直截的な表白ではなかったことを示しているとも考えられよう。

②は二月五日と六日の間に書かれているかなり長い一葉の恋愛観の書き出しの部分である。ここにこのようなことが書かれたのは、直接は数日前の①からの連続性によるのであろうが、そもそも①を書いたこと自体が、一年前の「雪の日」を思い出したからであり、②は日付からもまさにちょうど一年前の日をもって書いたことは明らかであろう。その後、③のように直接に「雪の日」に言及さえしているが、②のような恋愛に関するまとまった感想がここに位置することの意味は、二月四日という日付に触発されたからであるということを確認しておきたい。一葉は③にあるように、桃水への恋心を悟りの境地に達するための転機としていたが、そのことは日記の他の部分に表れている恋愛観でも繰り返し書かれている。そしてそれ

らは、桃水とのもうひとつの記念日である「別れの日」を意識するたびごとに断続的に湧き上がっているようである。

### (3) 「別れの日」

一葉は、明治二五年五月から六月にかけて、「萩の舎」の友人たちや、桃水を紹介してくれた野々宮菊子から、桃水が不品行であるという噂を聞き、動揺した。桃水自身、文芸雑誌『武蔵野』がうまくゆかず、病気がちであったことから、一葉もこのまま桃水に小説の指導を受けて、一家を養うところまでできるかどうか不安にも思っていた時期であった。そのようなことから、周囲の強い勧めに従って、桃水の指導を中断し、交際も断つ決心をした。六月二日に一葉は桃水を訪ね、世間の目がうるさいので、今後はしばらく訪問を差し控えると告げた。その後七月一二日に、中元の挨拶に行ったのが桃水との最後の別れとなった。四ヶ月ほど経って一葉の小説「うもれ木」が『都の花』に掲載されたのを契機に、桃水訪問も少しずつ再開されたのだが、やはり表立った二人の交際は、この七月一二日を最後の日として、一葉の心の中では意識されていたのである。しかもこの七月一二日は、桃水との「別れの日」だけでなく二重の意味で一葉にとっては忘れ得ない日であった。なぜなら、父則義が死んだのもこの日だったからである。七月一二日の日付を持つ日記を二箇所引用して、この日への一葉の感慨を見てみよう。

う。

### ①

十八といふ歳に、父におくれけるより、渚の小舟波に漂ひ初めて、覺束なき世をうみ渡ること四年あまりになりぬ。至り難き心のはかなさは、なべての世の中道を経難くして、やうやう大方の人に異なりゆく。(中略)孝ならむとする身はかへりて不孝になりゆく。げにかかるこそ浮世なりけれど、昨日今日ぞ、やうやう思ひ知らるる。是非の目印あらざらむ世に、猶漂ふ身ぞかし。寄せ返る波は高し。我が身はか弱し。折々には巻き去られんとするこそ悲しけれ。

(明治二六年七月一二日)

### ②

静かに数ふれば、誠や此人に疎くなりそめぬるは、一昨年の今日よりなり。隔たりゆく月日のほどに、幾度心の改まりけん。一度はこれをしをりにして悟道に入らばやと思ひつる事もあり。一度は再びと此人の上をば思はじ、思へばこそさまさまの悶えをも引き起こすなれ、諸事はみな夢、此人恋しと思ふも、いつまでのうつつかは、我に謀られて、我と迷ひの淵に沈む我身はかなし、とあきらめたる事もありき。そもそも思ひ絶えんと思ふが、我が迷ひなれば、殊更に捨つべきかは。冥々の中に宿縁ありて、遂に離れ難き仲ならばかひなし。見ては迷ひ、聞きては焦がれ、馴れゆくままに慕ふがとき我ならば、

遂に何事をか成し遂げらるべき。かくばかり慕はしく懐かしき此人を、余所に置きて、思ふ事をも語らはず、嘆きをも漏らさず、抑へんとするほどに、まさる心は大河を塞ぎてかへつて漲らすがごとかるべし。悟道を共々にして、兄のごとく妹のごとく、世人の見も知らざる潔白清浄なる行ひして、一生を送らばやと思ふ。

(明治二十七年七月一二日)

まず①の部分は、直接は父の命日であることからこのような感慨が記されている。この日の日記の書き出しは、「早起き。兄妹三人、築地に寺参りをなす」となっている。したがって①で書かれていることは、兄虎之助はすでに分家しているので、母親に対して自分が孝養を尽くさなくてはならないし、また母もそれを当然のこととして求めていることが中心となっている。しかし、傍線を付した箇所注目すれば、この表現は次に掲げる小野小町の和歌によっており、この和歌を媒介として、表現の背後には桃水への思いも重層していると考えられる。

定めたる男もなくて、物思ひ侍りける頃

小野小町

あまの住む浦漕ぐ舟の櫂をなみ世をうみ渡る我ぞ悲しき

〔後撰和歌集〕・卷一五・雑一・一〇九〇〕

この歌は、決まった夫もなく辛い思いをしながら世の中を生きてゆく我が身の悲しさを詠んだものである。「うみ」には、「海」と「憂み」が掛詞になっている。頼る人もなく生きてゆかなければならない辛さが歌われている。

一葉は一八歳で父親に死別している。世間の荒波に漂う辛さを表現するために、「世をうみ渡る」という小野小町の和歌の一節を使ったのであろうが、保護者としての父がいないというだけでなく、歌の詞書にあるように、「定めたる男もなくて」という自分自身の不安定さも重ね合わせているのではないだろうか。この七月一二日は、桃水との「別れの日」でもあったのであるから、ここには、桃水との辛い別れによって、精神的な支柱を失ってさまよう自分の象徴の意味も込められていよう。「是非の目印あらざらむ世に」という部分にも、頼るべき人としての父や兄を失い、さらには父の命日に、一時期は父とも兄とも頼んでいた桃水とさえも別れなければならなかったのであるから、一葉の喪失感・漂泊感是非常に強いものであったろう。世間の荒波に翻弄される自分の弱さを一葉が自覚して書き記した時、ここには直接引用されていないが、江戸時代に兼好の和歌と信じられていた、「世の中を渡り比べて今ぞ知る阿波の鳴門は波風もなし」という歌も思い起こされるのである。

②では、この日が桃水との「別れの日」であったことが強く意識されている。そして桃水への思いを悟道への導きとして認

識しようとはしているが、ほとんど一文ごとに心が正反対に動いている。激しい葛藤の後に、世間の誰も知らないような全く新しい男女関係を求めて、兄妹のような潔白で清浄な気持ちで一生を送りたいと書いている。②は、「諸事はみな夢」、「迷ひの淵に沈む」などに顕著なように、仏教的・老荘的な考え方が見られ、徒然草を彷彿させる面がある。次に、一葉日記における恋愛観と徒然草の関連が見られる箇所を取り上げたい。

#### 四 一葉日記の恋愛観と徒然草

樋口一葉における古典文学との関わりの中で、特に徒然草の占める位置が大きいことはすでに発表した二つの拙稿で述べたことであるが、<sup>⑩</sup>日記に書かれた恋愛観においても、直接または間接に徒然草と関わる考えが示されている。それらを列挙しながら考察を加えたい。本稿で今まで述べてきたような、桃水と関わりの深い日付ばかりではなく、それらとは無関係な日にも恋愛観は書かれているが、内容的には徒然草と関連するものである場合が多い。

① 恋は尊くあさましく無残なるものなり。つれづれの法師が発心のもと、文覚上人が悟道のしをりも、是に導かれてと聞き渡ること導けれ。花の散る所、月のかくるる

所、いづことしてか恋なからむ。

(明治二六年五月二〇日)

② 故郷は忘じ難し。はた忘ずべからざるものなり。されど故郷なつかしとて、ひたすらに心引かれてのみあらば、都会に出でて志す大事業のなるべきものかは。逢はでやみにし其人の上は喩ふるに恋の故郷ぞかし。(中略)一足は進まんことを願ひ、一足は帰らん事を思ふ我が心そも何ものぞ。憂ひ来たりては彼の人を思ひ、力弱くしては彼の人を思ふ。(中略)すべてうき世のそしりも厭はじ、親はらからの歎きも思はじなど様にさへ思はるるよ。あはれ迷ひはいつの日にか晴れん。まことの美をばいつの日にか見ん。

(明治二六年五月二七日)

③ げにや花は盛りに月は隈なきをのみ愛づるものにあらず。ひとへに相見るをのみ恋といふかは。谷間の水の下に忍び、高峰の花の折られねばこそ、悶え悶えて思ひは増すらめ。たとへば芝居に遊ぶ日の、見たらん後は見ぬ以前にまさりやはする。いにしへ人のいはゆる苦は薬の種ならずして、苦中の奥が則ち楽なり。

(明治二六年十一月一五日)

①の直前には、母が知人の所で、男女関係に関する忠告をしたが、本人が聞き入れなかったと嘆いていることが書かれている

る。したがって、①の記述は、この母からの話を直接の契機として、していることは明らかであるが、傍線を付した、「つれづれの法師が発心のもと」が恋であった、と一葉が考えている点に特に注目したい。

このように兼好の出家の原因を恋愛に求めるのは、当時の『文学界』の人々の間では定説であった。①が書かれるちょうど二ヶ月前に、一葉は平田禿木の訪問を受け、初対面ながら互いに徒然草を愛読しているという共通点によって、親密になっていたので、『文学界』の人々の兼好観・徒然草観を概観しておきたい。それによって、一葉の徒然草観も同時代の思潮の中で位置づけられるからである。まず、星野天知が明治三十五年一〇月発行の『女学雑誌』第三二九号甲の巻に、「徒然草に兼好を聞く」を発表している。ここで天知は、兼好発心の原因を悲恋として、次のように書いている。

伊賀権守橘成忠に知られて深く厚遇せられ、却て其女の中宮小弁が恋の奴となり、しのぶ山また異方に道もがなふりぬる跡は人もこそ知れと、臆病風に追はれつつ、破戒色情の鬼魅を以て木曾に走りしも、兼好なり。(中略)思ひたつ木曾のあさぎぬ浅くのみ染めてやむべき袖の色かは、是れぞ兼好をして兼好たらしめたる悲恋悩殺の悲涙なり。実に発心せしめし濃恋の声にして、其の遁世は、後宇多院の崩

御にのみ因れるに非ざるや明らけし。

この天知の説は、江戸時代の兼好伝説によりながらも、独自の考えを打ち出している。兼好と中宮小弁の恋は江戸時代にすでによく知られていたが、これをもって兼好遁世の原因とはされていなかった。天知も触れているように、当時までは兼好出家の原因は、後宇多院の崩御とされていたからである。それを天知は否定して、悲恋こそが原因であるとしている。

しかも天知は、この兼好論に先だつ『女学雑誌』第三二八号甲の巻(明治三十五年九月)に、「文覚上人の本領」を発表し、「文覚は袈裟女の生出したる上人なりとは言はず。然れども恋は文覚を産みたるなり」とか、「文覚は恋に陥みして其の蔵有せる極めて優しき慈悲の情けを充分に発達せしめぬ」、「兼好をして評せしめば、文覚は決していとさうざうしき男子に非ず。珠の盃底ある情けの人なりといはん」などと書いて、文覚発心の原因も袈裟への悲恋としている。

したがって①は、兼好と文覚が出てくる点では、このような天知の評論を踏まえて書かれているが、平田禿木の評論も同時に踏まえている。なぜなら、傍線部「花の散る所、月のかくる所」の表現は、禿木の文章の引用だからである。この表現に関して、筑摩書房版『樋口一葉全集』の脚注は、『源氏物語』花散里の光源氏の麗景殿の女御の妹君、同花宴の朧月夜の尚侍

のもとに立ち寄る光源氏を踏まえている。」と解説している。しかし、この直前に兼好のことが書かれているのだから、『源氏物語』まで遡る前に、まず徒然草から関連箇所を捜すべきであろう。徒然草の中で関連するのは、第一三七段冒頭の「花は盛りには月に限なきをのみ見るものかは」である。しかし、これだと表現の類似にとどまっている。一葉の表現そのものは、『文学界』第一号（明治二六年一月三十一日）に掲載された、「吉田兼好」という禿木の兼好論の、以下の部分によっているのである。

花は盛に月は限なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を恋ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほ哀に情深し。逢はでやみにし憂を思ひ、あだなる契をかこち、長き夜を独あかし、遠き雲井をおもひやり、浅茅が宿に昔を忍ぶこそ色このむとはいはめ。花の散る處月の虧くる處、世の定めなき人の身のはかなき、この忽微一髪の機はすなはち玄々の妙致かくる處にして、萬有の極致と人間の命運とは、あげてこの微妙の間に在り。

今引用した部分は、徒然草第一三七段の冒頭の表現を、一部省略はあるがほぼそのまま撰取している。禿木の「吉田兼好」は、天知の評論を受けて、それより一層詳しく書いており、特に徒然草の原文を自在に多数引用しながら論が進められてい

る。この禿木の評論をすでに一葉が読んでいたことは、日記の次の部分に明らかである。一葉は、訪問当日は、まだ目の前にいる禿木自身と「吉田兼好」の作者が同一人物であることに気づかず、翌日送られてきた禿木の手紙によって初めて気がついたのである。というのも、訪問の時は、平田喜一という本名を告げて、妹の邦子に案内を請うていたからである。

文学界一号に岩本君なるべし、禿木とかいへる名にて兼好の一章を書きたる。我も邦子も、そぞろ胸をさされて、この筋にも文章にもいたく感じ合へりしを、今この人のかく語り来て、まだうら若き人ともなく悲哀の情をよくも汲み知りたる。（明治二六年三月二一日）

名を見れば禿木とぞしたためける。さてはかの吉田兼好を草したる人なりな。哀れ知らざりしことよとて、邦子にも見する。年もいと若く幼じみたる人のいかにしてかくまでに悲恋の心を探り知りけん、歌人の居ながらにして名所を知るに等しく、踏みずして情の奥深く辿り給ふや。さはいへどかかる人こそ危ふきものなれ。月花にそそぐ涙のあまりは玉露となりて文章に匂はせ、しをりとなりて悟の道にしろせんは、いとよしかし。涙に迷ひて涙の人になりなん、いとあさましや。こは人の上のみならず我が上にもようせずは来たりぬべき事なり。目に見えぬかたきは、無常

のみならず。すべて形なきこそものはいみじけれと思ふ。

(同三月二日)

三月二日の日記に、評論「吉田兼好」の筋にも文章にも感動したと書いている。単に読んだ時だけのことでなく、二ヶ月後までこの禿木の文章の記憶が残っていて、①の傍線部になっているのであるから、一葉にとってよほど印象深かったであろう。また、二二日の日記で、禿木の情感の深さを高く評価しつつも、このような人は、涙に迷って涙の人となる危険性があるとして、文学と現実を区別して生きるべきであると判断を下している点も注目値する。このことは自分自身への戒めとして、禿木を「他山の石」としているのである。ここでも「悟りの道」のしるべとすべきであるという一葉の恋愛観が表されている。このような恋愛観は、『文学界』の人々の恋愛観と共通する部分もあるが、彼らの恋愛観がより情熱的・浪漫的・西欧的であるのに対して、一葉の場合は徒然草などの無常観を基盤とする方向性を有している。三月二二日の日記の最後の所で、「目に見えぬかたきは、無常のみならず」と書いているのも、やはり徒然草第一三七段末尾の、「閑かなる山の奥、無常のかたき競ひ来らざらんや」を念頭に置いて書いていることは明らかである。

さて、一葉が恋愛と悟りを結び付けて考えているのは、平田

禿木との出会い以後特に顕著になってはいるが、それに先立つ明治二六年二月二七日の日記でも、「恋も悟りもかの雪の日なればぞかし」と書いていたので、『文学界』の人々の影響ばかりではない。しかし、彼らとの出会いや『文学界』を読むことによって一層明瞭になったということはあるだろう。さらに、『文学界』の人々に関して重要なことは、彼らが一葉に対して抱いている共通するイメージとして、「すね者」という一葉像があるという点である。この「すね者」ということばも、天知の兼好観の中で使われていることばである。馬場孤蝶は、一葉が独身でいるのも、「柳の糸の結ばれとけぬ片恋や発心のもと」などと推測している。これらのことについては、別稿で考察した。<sup>1)</sup>

さて、次に②の部分について考察したい。②は①から一週間後に書かれたものである。かなり長いまとまった恋愛論となっているが、これが書かれた直接の契機は、五月二七日の新聞が『同楽叢談』という新雑誌の第二号に半井桃水作品が掲載される予告を載せているのを読んだからであろう。二七日の日記の初めの方でそのことに触れ、「今昔の思ひたえがたし」と書いている。それに続けて社会情勢に関する新聞記事をいくつか書き抜いた後、突然調子が変わり、②の恋愛論が書かれている。

こは恋人のことを故郷に喩えている点に、一葉の独自性が表れている。しかも、傍線部に注目すれば、これらの恋愛観の基盤となっているのは、ここでもやはり徒然草なのである。ま

ず、「逢はでやみにし其人の上は喻ふるに恋の故郷ぞかし」の部分、徒然草第一三七段の、「男女の情も、ひとへに逢ひ見るをば言ふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜を独り明かし、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔を偲ぶこそ、色好むとは言はめ。」による。この部分は先に挙げた禿木の「吉田兼好」にも引用されていた。「すべてうき世のそしりも厭はじ、親はらからの歎きも思はじ」の部分も、徒然草第三段の「露霜にしはたれて、所定めずまどひ歩き、親の諫め、世の謗りをつつむに心の暇なく、あふさきるさに思ひ乱れ、さるは、独り寝がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。」によっている。また、これは徒然草とは無関係だが、「都会に出て志す大事業のなるべきものかは」の部分は先に引用した、明治二七年七月一二日の「遂に何事か成し遂げらるべき」ということばと一年余りを隔てて響き合っている。

次に③は、明治二六年十一月一日に久しぶりに中島歌子を訪ねたことを詳しく書いた後に、「たとへば魚の水における如く、何故とも知らず愉々快々に半日を暮しぬ。此間の心はいにし半井ぬしを訪へる時の思ひに同じ」と書いた直後に始まつており、ここでも②の場合同様、桃水に関するほんの少しの言及が日記でなされるとたちまちそれに続けて恋愛観を書かずにはいられない、一葉の桃水への強い執着心の表れが見られる。表現的には、この③もやはり徒然草第一三七段冒頭部の引用とな

っている。

## 五 作品への徒然草の投影

以上見てきたように、一葉の日記には徒然草を基盤とする恋愛観が何箇所にもわたって書き込まれていた。このような徒然草の大きな影響力を考え合わせると、一葉の作品の中に表れている恋愛観にも、一見徒然草とは無関係であるように見えたとしても、徒然草と関わる部分が発見されるのではないだろうか。このことについて、最後に簡単に触れておきたい。たとえば、『にこりえ』に次のような箇所がある。これは第六節の部分で、お力が結城朝之助に、自分の身の上を語る場面である。

そもその最初から私は貴君が好きで好きで、一日お目にかからねば恋しいほどなれど、奥様にと言ふて下されたら何うでござんしよか。持たれるは嫌なり他処ながらは慕はしし。一ト口に言はれたら浮気者でござんせう。

傍線を付した部分は、「他処ながらは慕はしし」というごく短い表現であり、この前後には徒然草に関連する箇所もないので、ここを敢えて徒然草と関連づけるのは無理があるかもしれない。しかし、徒然草第一九〇段に、「妻といふものこそ、男の持



つまじきものなれ。『いつも独り住みにて』など聞くこそ、心にくけれ。(中略)よそながら時々通ひ住まんこそ、年月経ても絶えぬ仲らひとならめ。」とある兼好の恋愛観と何らかの関連があるのではないだろうか。お力が、結婚するのは嫌であり、一緒に暮らさずにいた方がよいのだと言っているのは、第一九〇段の男性の立場からの恋愛観を逆転させて、女性であるお力に言わせているとも取れるのではないだろうか。『にぎりえ』には、直接徒然草と関連する箇所はここ以外にはみあたらない。しかし、この小説の未定稿では、徒然草からの引用が書かれているものが残されている。たとえば次のような箇所がある。

- ① 時の雨に大雨大路を洗ひて光景のあらたまる事、祭りわたりて後の棧敷、すさまじきものはと誰やらの口まねもいひつべし。<sup>12)</sup>
- ② 家にあり度は松桜、松は五葉桜は一重、ことやうならぬをよしとかいへり。<sup>13)</sup>

①は、未定稿Aの2に含まれるもので、徒然草第一三七段の葵祭の情景を踏まえて書かれている。また、②は、未定稿C IVの37の書き出しである。これも徒然草第一三九段の書き出しの「家にありたき木は、松、桜。松は五葉もよし。花は一重なるよし。」によっている。「ことやうならぬをよしとかいへり」の部

分も、第一三九段全体の主旨に沿った書き方となっている。しかも、この②の直後には、菊の井の女性たちの生き方として、仕事を勤め上げた後には普通の結婚をするということが書かれており、「ことやうならぬ」生き方をよしとする考えを引き出すための、いわば序詞的な使われ方がされている。これらはどちらも最終的には使われなかったのであるから、徒然草の影響をむしろ払拭する方向で作品を完成させたと結論づけた方がよいのかもしれない。しかし、少なくとも当初の構想では徒然草の引用があったわけで、わたしとしてはそのことを重視したいのである。

ここで再び『にぎりえ』の第六節に戻れば、未定稿での徒然草の摂取状況と考えると、この部分の恋愛観の背後に徒然草の投影が見られるとしても、それほど突飛なことではないだろう。しかも、今まで見てきたように、一葉日記に散見される恋愛観が桃水への思いを一葉なりに客体化したものだだったことから、『にぎりえ』の結城朝之助には桃水のイメージがある。このことは桃水をモデルにしたという意味ではなく、一葉の実人生における桃水の果たした役割と、『にぎりえ』の中で朝之助が果たしている役割には、同様の側面が見られるということである。

一葉にとつて桃水は、現実の一葉の生活をいささかも変革しなかった。朝之助もお力に対して何らの具体的な援助はしな

った。しかし、彼らは一葉とお力に自己を語らせる役割は果たしたのである。『にぎりえ』において朝之助の登場が要請されたのは、お力に自らの過去と現在を語らせるためであろう。一葉の人生において、桃水と出会ったことは、一葉が桃水に恋愛感情を抱き続けたことに意義があるのではなく、桃水という対象を得て初めて、一葉は自己を語ることができた点に求められるのではないだろうか。一葉の日記はそのことをわたしたちに示している。

## 六 おわりに

一葉は、和歌でも『源氏物語』でもなく、徒然草を最大のよりどころとして、恋愛観のみならずより広い文学観や人生観を獲得した。「いかで天地の自然をもととして、変化の理にしたがひ、風雲のとらへがたき人事のさまざまなる、三寸の筆の上に呼出してしがな」(明治二十六年二月一日)とあるのも、「常住ならんことを思ひて、変化の理を知らねばなり。」という徒然草第七四段によつて書かれたものである。一葉日記を詳しく読んでもゆけばまだまだ徒然草との関連箇所がいくつもある。本稿では、桃水とかかわる部分を中心に取り上げ、一葉の日記に見られる桃水への思いが間歇的に現れることに注目し、その日付がほとんどの場合、何年か前に桃水との印象深い出来事があった

日であることを確認し、それによつて一葉の日記において桃水への思いを吐露するのが一葉自身の日記執筆の大きな動機のひとつであること、さらに一葉の恋愛論は徒然草の恋愛観を基盤としていること、そして最後に徒然草は日記のみならず一葉の作品の中にも投影していることを考察した。

一葉は桃水と出会う以前の日記「身のふる衣 まきのいち」の中ですでに、きわめて徒然草と近い美意識や価値観を生得の資質として備えていた。そのような一葉の個性は、桃水と出会い、桃水への恋に苦悩することによつてさらに開花し、恋愛にとどまらず、人間観や人生観にも徒然草的なものが現れたのであった。ただし、徒然草の恋愛観は、恋愛に没入することは否定するが、恋愛の情趣自体は重んじているので、一葉のように、恋愛を悟りへの契機として重要視することはない。

晩年、一葉の本郷丸山福山町の家を『文学界』の青年たちが頻繁に訪問し、長時間文学の話に興じた時も、一葉は彼らと自分の世界が異なることを自覚し、彼らひとりひとりの人間性を鋭く捉えている。それらの日記に書き留められている人間観察の的確さは、徒然草を思わせるものがある。しかも、それらの中にも徒然草の章段の断片が、一葉自身の文章と分かちがたく縫り合わされており、一葉における徒然草の影響力の深さを知ることができる。たとえば、次のような日記の記述を見てみよう。

我が身は無学無識にして、家に産なく類縁の世にきこゆるもなし。はかなき女子の一身をささげて思ふ事を世になさんとすると、心に限りあり。智恵の極み知るべきのみ。彼（馬場孤蝶と平田禿木）は行く水の流れに落花しばらくの春をとどむるの人なるべく、いかでとしへの友ならんや。（中略）夜更けて風寒し。空ゆく雲の定めなきに、月の晴れ曇る事今さらの様に思はれて、燈火の影に物言ふ孤蝶子も、窓に倚りて沈黙する平田ぬしも、その中に茶菓取りまかなふ我も、ただ夢の中なる事ぐさに似て、禿木ぬしがいはゆる他界にあるらん誰人かの手の弄ばるる身ならずや、と思ふ事深し。（明治二八年五月一〇日）

死の一年半前に書かれたこの日記には、一葉が自分と他人の違いを明確に認識していることが書かれているが、そこには、さらに一段と高い所から一葉たちの様子をじっと見下ろしているもうひとりの一葉がいるような、不思議な静謐感が漂っている。その中で傍線部の表現は、徒然草第四四段の、「都の空よりは雲の往来も速き心地して、月の晴れ曇る事定め難し」によっていると思われる。一葉が辿り着いた心の境地には、常に徒然草と密接な関連が見出されるのである。

## 注

- (1) 『樋口一葉研究・増補改訂版』（中央公論社・昭和四三年）、第七章第二節の二。
- (2) 樋口一葉の日記・作品等はすべて、筑摩書房版『樋口一葉全集』による。私意に句読点を付し、表記を改めた箇所がある。
- (3) ただし、日記の余白には、当時の新聞記事による抜き書きも書かれている。
- (4) 「しのぶぐさ」という表題は、明治二五年六月から九月の日記でも使われている。この時期は桃水との交際を断絶した時期である。
- (5) 『樋口一葉全集』第三巻・上、四一―四一二ページ。
- (6) 酒巻寿『おてんば歳時記』（草思社・一九七九年）、一五一ページ。
- (7) 半井桃水「一葉女史」（『中央公論』・一九〇七年六月、小学館『群像日本の作家』・3・樋口一葉』所収）。
- (8) 新日本古典文学大系『中世日記紀行集』所収。
- (9) 『樋口一葉全集』第三巻・下、六九三ページ。
- (10) 『樋口一葉と徒然草』（放送大学研究年報）第9号・平成四年三月三〇日発行、「一葉の恋愛観と徒然草」（放送大学研究年報）第10号・平成五年三月三〇日発行）。
- (11) 「徒然草享受の一系譜」（久保田淳先生退官記念論集・明治書院・平成六年）。
- (12) 『樋口一葉全集』第二巻、三四ページ。
- (13) 注12書、九〇ページ。

（平成五年十一月一〇日受理）

## Ichiyo's Diaries as 'the Tosui Calendar' and *Tsurezuregusa*

Yuko SHIMAUCHI

### ABSTRACT

This paper examines the love of Higuchi Ichiyo for Nakarai Tosui. Ichiyo's view of love is related to the 14th century classical work *Tsurezuregusa*. In her diaries, she sometimes writes of her love for Tosui. Those dates are the day of their first encounter, a day of snow, and the day of their farewell day.

Thus, we may see that Ichiyo's diaries are written as a collection of her memories of Tosui.